大伴宿禰家持、同じ坂上家の大嬢に贈る歌一首

四〇八番

なでしこが　その花にもが　朝な朝な　手に取り持ちて　恋ひぬ日なけむ

大伴宿禰駿河麻呂の歌一首

四〇九番

一日には　千重波敷きに　思へども　なぞその玉の　手に巻きかたき

大伴坂上郎女の橘の一首

四一〇番

橘を　やどに植ゑ生ほし　立ちて居て　後に悔ゆとも　験あらめやも

和ふる歌一首

四一一番

我妹子が　やどの橘　いと近く　植ゑてしゆゑに　成らずはやまじ